居場所が紡ぐこどもの未来と地域の未来

～こども食堂の拡がりが意味するものとこれからの展望～

所属　川崎医療福祉大学
氏名　直島　克樹

【はじめに】

「こども食堂」が世間から注目を集め、実際に多くの地域で取り組み始められたのは最近のことである。特に、子どもの貧困問題との関連で紹介されたことをきっかけに、食事を無償または格安で提供する「こども食堂」は子どもの貧困対策である印象が世間に広がっている。

たしかに、満足な食事を摂れていない子どもは決して少なくなく、給食がない長期休暇などには体重が減ってしまうような子どもの事例も報告されている。食事を摂っていたとしても、栄養バランスなどが悪く、虫歯など健康状態に影響のある子どもが存在するのも事実である。実際にそういった状況にある子どもたちに食事を提供しているこども食堂も存在している。

しかし一方で、多くのこども食堂は、地域のすべての子どもを中心に置いて大人も集い、食事や学習、社会体験など多様な取り組みが展開されてきている。実施される場所も多様であり、地域の公民館や高齢者の福祉施設なども活用されている。きっかけは子どもの貧困問題への関心からが多いが、具体的な展開は必ずしも食や学習等に限定されないものが多い。本報告では、こういった展開が何を意味しているのか、そして、「こどもの未来は地域の未来、地域の未来はこどもの未来」という視点に立ち、こども食堂の拡がりも含めたこれからの展開に対する展望を見出してみたい。

【変わりゆく日本社会】

家族形態の多様化、雇用の非正規化、所得の低下など、近年の日本はこれまでつくり上げてきた既存のシステムの見直しが急務となっている。例えば、男性が働いて女性が家事をするという家族のあり方は、共働き家族へと逆転し、約2倍へとその差は広がりつつある。それにもかかわらず世帯所得は低下し続けており、世帯所得が400万円以下の割合は2015年で40%を超えている（男女共同参画白書平成28年版）。また、ひとり親の相対的貧困率は 54.6%（2012 年）と先進国でも突出して高い値となっている。貧困をはじめとする社会問題の顕在化が著しい一方で、生活保護をはじめとする社会保障は削減され、ますます自己責任が問われる社会へと変容してきている。

【子どもの貧困の社会問題化】

このような中で、6人に1人の子どもが貧困状態にあることが報告され、多様な関心を集めていることは記憶に新しい。近年進みつつある研究の進展は、そういった実態を明らかにすることに貢献しつつある。例えば、貧困と健康の相関、虐待、暴力との結びつき、低学歴や教育・就労機会の喪失などが明らかにされるに従い、貧困の影響が客観的に示されてきている。

しかしながら、数字的には明らかだが、その実態が見えないという声が地域に多くあることも事実である。貧困とは経済的なもののみを意味するのではなく、人とのつながり、家族の団欒の時間や社会体験の不足など、非常に多岐に渡る日々の生活の困りごとを含んだものである。そういった困りごとは外からでは見えにくい。当事者経験のある若者や当事者たちからの声、日々子どもたちに関わる教員や支援者が問いかける、日々の生活に寄り添った視点もまた重要であると考えねばならない。

【表出する地域課題とのリンク】

子どもの貧困問題が明らかにされる中で、子どもの貧困問題に対して、何か自分にもできないのかという、子どもへの切実な想いの一つの形がこども食堂の拡がりであったことは間違いない。お金の提供や学習支援などはハードルが高いが、普段から作っている食の提供であればできるのではないか、何かできることから始めたいという想いの結実とも言えよう。

地域の子どもたちのためにという活動を考え始めると、継続性という課題と共に、子どもも含め、地域にいる大人たちのつながりなどが見え始める。その中で地域の関係性の希薄化やつながりの偏り等とも向き合うことになるかもしれない。学校等も含め、自分たちが目指す地域はどういった地域なのかも考えな

ければならないかもしれない。そういった議論はこれまであまりしてこなかった地域が当然多い。地域活動の後継者問題も今後より深刻になってくる。いずれにしても、子どもの貧困に端を発した地域での取り組みが、既存の地域課題とも決して無関係ではなく、両者は結び付いていくことになると考えねばならない。

【こども食堂の拡がりが意味するところ】

各地域におけるこども食堂の拡がりは、ある意味でこれまで衰退していた市民活動再生への動きとも捉えることができるかもしれない。そして、その場は“食”だけでなく、それを媒介として人と人が出会い、学習や社会体験など多様な主体が関わる地域活動の創出の場となってきている。それに伴い地域のつながりも紡ぎ直され始めている。この子どもも含めた地域のつながりの紡ぎ直しが、新しい地域の形をつくっていく原動力となっていくと考えられるのである。

その結果、地域で子どもたちを支えていくためには、地域そのものも子どもから高齢者まで様々な人たちによって支えられなければならないことが明らかになっていくであろう。「支える→支えられる」という一方通行的な考えではなく、「支える⇔支えられる」といった双方向的な関係性の創出が必要なのである。こども食堂の拡がりは、子どもから高齢者まで双方向的な関係性を創出していく場の拡がりであることが必要であり、そのことが社会全体で子どもを支えていくことへとつながるのである。

【こどもの未来は地域の未来、地域の未来はこどもの未来】

こども食堂をはじめとした各種の居場所は、今後、地域の多様な主体が関わり合い、つながりを紡ぎ直しながら、子どもを中心としつつ、高齢者も含めた様々な人たちが支え合っていく場となるのであろう。食などを通じた子どもから高齢者まで多様な主体が参加する場の形成は、地域に新しい未来を導くことになると考えられる。この地域の未来がこどもの未来に影響を与えていくことは容易に想像がつくであろう。

一方で、すでに述べたように、こども食堂の拡がりは、子どもたちのため、さらには社会全体に対する市民運動の可能性をも包含するものと考えられる。なぜならば、こども食堂の拡がりは、子どものために何とかしたいという想いが結集したものであり、それは子どもの権利を守り、獲得することとも無関係ではいられないからである。給食費の未払い、新入学に伴う制服や教材の購入、修学旅行の積み立てなど、実は困難の元を断つことによって防ぐことのできる問題は多々ある。この小さなひずみを一つずつでも取り除いていくことが重要である。食を通じたこども食堂のような居場所は、他の居場所とネットワーク化を図ることによって、社会全体で子どもを支えていく形の具現化への貢献が可能となるはずである。この直接的な関わりからネットワーク化の推進、社会への働きかけ、そしてそのことがさらに直接的な関わりをより豊かにしていくという螺旋的な循環をつくっていくことが必要であると考えられるのである。

“マクロ”領域（社会制度・社会政策）

“システム”の好循環を生み出すこと

筆者作成

【略　歴】
関西学院大学大学院後期課程人間福祉研究科人間福祉専攻単位取得満期退学
川崎医療福祉大学医療福祉学科講師、岡山子どもの貧困対策ネットワーク会議代表
公益財団法人子どもの貧困対策センターあすのばアドバイザー
岡山県子どもの未来応援ネットワーク会議委員、岡山市児童福祉審議会委員　など